

自由部門

タイトル：わたしの家に蟹が来た

作者：文学部 日本文学科 1年1組 山崎 未侑

わたしの家に蟹が来た。それは二月のこと、わたしがまだ机にかじりついていた時だ。母親が SNS の懸賞で毛蟹を当てた。マジか。話を聞いたときに思った。「マジか」最初は全く信じられなくて「お母さん、慣れない SNS 使って騙されてるんじゃないの」と本気にしていなかった。一週間後、クール便でやってきたそれは、立派な毛蟹だった。しかもヤツはまだ生きていた。発砲スチロールの中で、うごめいていた。

ヤツは、私たちが見ていない隙を狙って逃げようとした。ふと見ると、しっかりと閉めていた発砲スチロールの蓋が少し空いているのだ。そして少しだけヤツの朱い脚が見える。家の中を徘徊されるのはこちらとしても御免なので、ヤツが逃げようとするたびにしっかりと蓋を閉めた。蓋を閉めるとき、蟹をまじまじと観察した。そして思った。こいつは殺されまいと私たちに抗っている、生きようとしている、と。けどもうここには逃げ場もないし、今にも調理されようとしているので、蟹としてはただの悪あがきにすぎない。蟹もそれをわかっているのだろう。でも蟹は私に抵抗の意思を見せていた。

私の堪えられなくなった衝動が、グッと深く蓋を押した。早く死にますように、と

夜になって、ようやくヤツは蟹鍋に調理されることになった。母が大きな鍋いっぱいに入れた水に蟹を沈めた。そのころにはもう弱って動きは鈍くなっていたが、やっぱり微かに抵抗していた。「こうしたら早く死ぬからね」と母が鍋に蓋をした。横で見ていた妹が、かわいそう、と泣いた。私も心がギュツとなった。蟹は静かに他の食材と共に蟹鍋になった。

蟹鍋はそれはそれは美味だった。私の記憶の中で、蟹を食べたことは今回が初めてで、スーパーで売っているカニカマとは全然違った。カニカマからは濃くて美味しい出汁なんか出ないし、ホンモノはあんな毒々しい赤色なんかしていない。ほんのりピンク色で、てゆるんとした食べごたえ。やっぱり殻を自分で剥いて食べるからこそ蟹は美味しいのだ、ということを知った。その日の食事で、私はいつもより心を込めて、「ごちそうさまでした」と手を合わせた。

この日、うちに生きた蟹が来たことは、私にとって人間のしている「食事」という行為について、深く考えさせられる出来事となった。私たちがいつも口にして牛や豚や鳥や魚介類は、スーパーで「加工」されてから並べられている。今回は、その「加工」という段階を私たち自身が実際に体験したのだ。私たちの祖先が狩りをして、それを食料にしていたよう

に。

あの時、無駄だとわかっていながらも最後まで抵抗をやめなかったあの蟹の姿を見て、私と蟹は姿は違えど同じ生き物で、その生き物の命を、私が生きるためにいただこうとしている、と思った。だからこそ「いただきます」という言葉があるのだろう。改めてこの言葉の意味を認識できた気がした。これを機に、私がベジタリアンやヴィーガンになった訳ではない。お肉だって食べたいし、お寿司だって大好きだ。いつかまた蟹を食べる機会もあるだろう。それに今日だって、私は生きるために食事をする。

だけど、それらは単なる「食料」じゃなくて「命」である、ということを頭の片隅に入れて、これからも「いただきます」を言いたい。